

学 位 論 文 題 名

# ヘルメスの変容と文学的解釈学の展開

－ヘルメネイン・クリネイン・アナムネーシス－

## 学位論文内容の要旨

審査委員会は、本論文が提出されて以降、9回にわたって委員会を開催し、申請論文を精読して慎重な審査を行うとともに、厳正な口頭試問を実施し、十分に審議を重ねて適切な評価に努めた。その結果、いかに記述した審査内容に鑑み、審査委員全員が一致して、三浦國泰氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達し、文学研究科教授会に報告した。研究科教授会は、この報告に基づいて審議を行い、これを承認したものである。

本論文は、古代ギリシアの世界から現代に至るヨーロッパの文学伝統とその研究の軌跡を解釈学の視点から包括的に論述したものである。

古典文献解釈および聖書解釈から近代の一般的理論として確立されてきた解釈学の歴史的な成立過程が記述されるとともに、アリストテレス詩学を基点にして中世、ルネサンス、初期ロマン主義、啓蒙主義、実証主義と精神史、ロシア・フォルマリズム、さらには現代の受容美学やポストモダンの動向に至るまでの関連領域が、解釈学の循環構造という観点から俯瞰的に論じられている。さらに、カフカ、トーマス・マン、ベンヤミンといった作家のテクストが同様の観点から個別に分析されている。

また、本論文のもう一つの主要なテーマとして、読書論、翻訳、異文化理解の問題が解釈学的地平の下に考察されており、特に、H. G. ガダマーの理論的な著作（『真理と方法』）に依拠しながら、解釈学のもつ現代的な意義とその可能性が強調されている。

本論文の考察は多岐にわたり、きわめて対象範囲の広い内容となっているが、その基本的な課題はふたつある。第一の課題は、ヨーロッパにおける文学研究と文学の解釈ないし批評の流れを、解釈学および解釈学的な循環という視点から統一的に記述しようというものである。アリストテレスに始まる文学研究から、フランスの新旧論争、シュレーゲルの

批評理論、トーマス・マン、ベンヤミン、またハーバーマスやデリダといった、通常は解釈学という理論的な枠組みでは論じられることが少ない論客の文学研究、あるいは文学観に、解釈学的循環構造があることを明らかにして、ヨーロッパ文学の営為が解釈学的な伝統との対決と受容であることを記述しえたのは、本論文の新しい成果である。

第二に、本論文は、文化の受容という営為が、いかに解釈学的な構造を有しているかという点を解明するという課題を有している。トーマス・マンの作品、またベンヤミンのバロック演劇論が、過去の文化を想起し、その記憶によってテキストと自己を救済する行為として析出され、さらにはシュライアーマッハーからディルタイを経てガダマーに至る解釈学の流れを、翻訳という、異文化受容に際しての極めて根本的な問題の視野から統一的に論述しえた点は、本論文の大きな成果といえる。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 山 田 貞 三

副 査 教 授 植 木 迪 子

副 査 助 教 授 石 原 次 郎

## 学 位 論 文 題 名

### ヘルメスの変容と文学的解釈学の展開

－ヘルメネイン・クリネイン・アナムネーシス－

三浦氏の論文は、古代ギリシアの世界から現代に至る文学研究の軌跡を辿りながら、解釈学に焦点を絞り、その成立過程と展開および文学的解釈学の諸相を大局的に捉えようとしたものである。

2部構成となっているこの論文の第1部第1章では、古典文献解釈、聖書解釈における解釈学の基本構造が説明され、中世、ルネサンスを経て近代の学問理論として確立されていく解釈学の歴史的な成立過程が記述されている。また、文学研究におけるさまざまな方法論の基本的立場が紹介され、特に、ヤウスの受容史的研究は、「伝統の受容」、「地平の融合」というガダマーの解釈学に通底する観点であること、同時にハーバーマスの「批判的解釈学」やアドルノの「否定弁証法」は、伝統を重視するガダマー解釈学を批判的に克服しようとする試みであることが指摘されている。

第2章では、解釈学と文芸批評の関係が論じられている。まず、アリストテレス詩学と近代批評精神との相克的関係に焦点が合わされ、その際の重要な契機として「フランス＜新旧論争＞」が取り上げられる。この論争は、ヘルダーの歴史観、Fr・シュレーゲルの反省的批評概念を準備することになり、啓蒙主義からロマン主義への時代の転換期において、文芸学が創造的な批評活動へと変遷してゆく過程が論述される。また、本章は、解釈行為における「受容の両義性」、すなわち「伝統の受容とその克服」という解釈学的循環構造を、トーマス・マン、リクール、デリダなどに関連させて論じ、特に「脱構築」作業として過去の文学を徹底的に解体しているかにみえるデリダなどのポストモダンの文学活動も、過去の伝統に足場をおいている点が指摘されている。

第3章では、文芸批評とテキスト解釈の試みが主題となっており、ベード・アレマンの

研究を解釈学的循環構造の地平拡大の模索として捉えてその積極的な意義を評価している。また、『オデュッセイア』の冒険物語をめぐるカフカの神話解釈とホルクハイマー/アドルノの『啓蒙の弁証法』を取り上げ、ヨーロッパ文学の伝統をその連続性と非連続性という観点から概観しながら、現代文学のテキスト解釈がいかに循環構造の問題と密接に関連しているかを明らかにしている。

第2部のテーマは、「記憶」と「翻訳」の問題であり、第1章では、「古代の記憶術」と現代文学との関係、特にトーマス・マンとベンヤミンがその考察の対象となっている。旧約聖書を素材としているマンの『ヨーゼフとその兄弟』は、太古の神話的記憶へ遡りながらも、実は現代人トーマス・マンの脱神話化が主題となっていると言う。また『ドイツ哀悼劇の根源』や『パサーージュ』論におけるベンヤミンの意識は、つねに没落し忘却された魂の鎮魂、救済に向けられており、「記憶」と「想起」の問題がベンヤミン文学の主要なテーマになっている点が強調されている。

第2章は、ガダマーの『真理と方法』第3部を取り上げ、異文化を理解するための基礎作業として、文献、資料、情報、メディアなどの多様なテキストをいかに「読む」べきかという、解釈学の基本的課題を「翻訳論」の観点から考察している。とりわけシュライアーマッハーの<プラトン>翻訳に注目して解釈学における翻訳問題の重要性を論じている。また、本論文の掉尾を飾るベンヤミンの翻訳論では、「聖書の行間翻訳」に翻訳の理想を見ているベンヤミンの難解な比喩的表現が読解され、論者は、とりわけ離散した民の「器の破壊」の比喩にベンヤミン翻訳論を理解する重要な鍵を見ている。

なお、本論文の構成は以下の通りである（概略）。

## 第1部 解釈学の成立と文芸理論・批評の諸相

### 第1章 解釈学と文芸理論

### 第2章 文学的解釈学と文芸批評

### 第3章 文芸批評とテキスト解釈の試み

## 第2部 記憶と翻訳 ― 解釈学の地平における ―

### 第1章 アナムネーシスとしての文学機能

### 第2章 解釈学と翻訳

エピロゴス 再び「ガダマーの翻訳論」、あるいは「翻訳としての読書論」

(A 4判全341頁、400字詰め原稿用紙換算1023枚)